病院図書室　13(3):115, 1993

図書館員の四季

司書に憧れていたけれど・・・

大阪逓信病院　浦谷　圭子

毎日を伝票処理に追われる平凡なＯＬ生活をしていた私が、ひょんなことから病院図書室に勤めることになった。

好きな本に囲まれて…なんていう夢ははかなく崩れさり、書名を見ているだけで頭痛が起きそうな医学書や雑誌の山があるばかり。その上、病院とは二車線道路を隔てた看護学院の図書室に居候の身の上で、頼る人は誰もいない。夏の日差しの猛威に脅えつつ、重たい本を病棟や医局に運ぶ肉体労働に、さぁこうなったら逃げ出すしかないと思い詰め、身の不運を嘆く日々だった。

来室者もない時は孤独のあまり「言葉を失ってしまう・・」と悲壮になり、そのくせ利用者が現れると、眼を合わさないように忙しそうに書庫の中を動き回っていた。それでもしつこく（？）質問する人には、分からないとつい勤めて日が浅いことを口実にして逃げてしまう、そんな矛盾と反省も数知れずあった。

でも、“せめて一年”を目標に、自分自身を叱咤激励し『医学資料の整理と利用』を先生に、辞書を片手の業務の毎日。そんなとき、病図協からの勉強会の案内に思わず参加し、同じ悩みを持つ人と話し、先輩方に親切に指導していただいた。おかげで、肩に入っていた力もスッと抜け、気持ちも新たになった。そして今、数多くの資料をいかに利用しやすく、場所の不便さをどうカバーしたらいいかと試行錯誤しつつ、さらに図書室のコンピューター化の実現に向け意気込んでいる。

もうすぐ２年になる。まだまだ、駆け出しの図書館員としては、勉強しないといけない事は多いし、いろいろ問題もあるけれど、とりあえずは、“今日も元気で頑張ろう！”。

図　書　館　の　一　年

愛仁会看護専門学校　酒井　紀美子

早いもので、愛仁会看護専門学校という、今までに経験した事のない看護の世界に身を置いて、一年が経ちました。「図書館員の四季」など感じる余裕もなく日常業務をこなすのが精一杯の毎日だったように思います。しかし、私と一緒に入学した現在の二年生も、６月に初めての実習に入るため各々受け持ちの科のマニュアルなどを借り出しては準備を進めています。次は老人看護にはいるんだなとか、絵本を持っているのをみては小児科に変わったのかな、幼稚園実習は楽しそうだなと借りていく書籍の種類によって今学生がしている事を自分なりに把握してきました。

はじめての夏休み、少しは緊張がとけて勉強から解放され、一般書の書棚から推理小説、お料理の本などが貸し出されていきました。また夏休み中開室している図書室に卒業生が看護研究のため（懐かしさのため？）久しぶりに仕事の合間をぬって訪れてくれるのも、盛夏の楽しい思い出のひとつです。秋、学生たちにとっては苦しい試験が待っています。一冊の本に何人もが集中する時期です。コピー機などの充実、複本の必要性を強く感じました。そして１月、２月と３月初めの国家試験に備えての受験勉強は、緊張きわまりないものでした。このようにして、図書室における１年は学生の授業、カリキュラムにそって動いていくことを改めて感じました。

２年目の今年、学生の動きからそれと知らされるのではなく、暗中模索している学生に図書室側から書籍を提供できる、また私自身が学生のニーズに応えられるようがんばっていくつもりです。少しでも利用しやすい図書室をめざして……